

## ディレンマ話

著者	江口 一久
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	45
ページ	598-608
発行年	2003-12-26
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00001825">http://doi.org/10.15021/00001825</a>



デ  
イ  
レ  
ン  
マ  
話

## 267 狩人とイスラム教師とその息子

さて、ある村で、ある狩り人ほどきれいなよめさんをもつてい  
る人はいなかった。

さて、ある村で、ある父親ほどよい息子をもつている人はいな  
かった。

さて、この父親のところのみしらぬ人がやってきた。父親はみ  
しらぬ人と屋敷の入り口の小屋にすわっていた。みしらぬ人はイスラ  
ム教の先生だった。

さて、そこに子どもがはいながらやってきた。さて、先生はそ  
の子どもをみて、わらった。そこで、子どもの父親は先生に、「お  
まえさんは、どうして、この子どものことをわらったのか。子ども  
のなをみたのか」という。先生は、「わたしにウシを二頭おくれ。  
おまえさんにおしえてあげる」といった。父親は先生にウシをやっ  
た。先生は、「よろしい。おまえさんの子どもは、おおきくなって、  
女を手にいれるが、おまえさんの財産をつがないだろう」といっ  
た。父親は、「よろしい。それでも、息子はわたしをつぐ」といっ  
た。(息子は成長して若者になった。)父親は(息子の世話をさせる  
ための)奴隷たちと、息子を野原のまんなかにつれていった。父親  
は息子のために小屋をたててやり、ウシをあたえた。

さて、父親は、「女があそこにいかないように」といった。

さて、そのころ、狩り人はほかにいないほどきれいなよめさん  
をもつていた。狩り人はたちあがった。夜があけて、朝になると、狩  
りにでかけていった。狩り人はいくと、ダイカーにであった。ダイ  
カーをうとうとするけれども、うまくいかない。そのうちに、ある  
いていくと、野原のまんなか屋敷があった。喉がかわいていた。  
狩り人は、「なんと、屋敷があるなら、そこにいこう。ひよつとし  
たら、水が手にはいるかもしれない」といった。先生の奴隷たちは  
仕事でいそがしくしていた。狩人がいくと、若者がすわっていた。  
狩人は、「おねがいだ。水がのみたい、水がほしい」という。若者  
はいくと、乳をくんで、狩りにもつてきた。狩人はしぼりたての牛  
乳をのんだ。若者はべつの牛乳をヒョウタンの筒にいれて、狩人に  
わたした。若者は狩りに、「喉がかわくなら、家にかえるとき、の  
めばよい」といった。

さて、狩人は、「ありがとう」といった。狩人は道があるき、家  
にかえってくる。狩人はダイカーにであり、ダイカーを射る。狩人  
は獲物の皮をはぎ、頭にのせて、自分の家にかえつていった。狩人  
のよめさんはいくと、その肉をいためた。日暮れどきになると、よ  
めさんは狩りに湯をわかつてやった。狩人は行水をした。狩人とよ  
めさんが小屋にはいると、よめさんは狩人の体にバターをぬつてや  
った。

さて、狩人は、「おまえ、きょうはひどい目にあった。わしがど

そこをあるいていくと、野原ではみつからないようなきれいな若者がいた」という。よめさんは狩人に、「ほんとう」といった。狩人は、「うん、ほんとうだ」といった。よめさんは、「わかった」といった。よめさんは心のなかで、「よろしい。どこにいつても、その若者をつつけてやる」とおもった。夜明けどき、よめさんは、「わたしはおまえさんがウマレイヨウをうつ夢をみた」といった。狩人が、「どのへんでだ」という。よめさんは、「あのへんよ」という。ほんとうのこと、よめさんは若者のところにいきたかったのだ。

さて、狩人は顔さえあらわずに、矢筒を肩からさげて、はしっていく。狩人はよめさんに幸運をもらったといった。狩人はあるいていく。狩人は一日中あつちこつちがあるいた。よめさんはよい格好をして、道があるいていく。よめさんは、「あの人はここをきのうとおったといった。そこは、どこそこだ」という。よめさんがいくと、とうとう、さがしている若者がいた。

さて、若者は女に、「どうしてここにきたのか」という。女は、「わたしはおまえさんのことをきいて、おまえさんのところにやってきました」といった。若者は、「よろしい。ここにかくれていなさい。わたしは、真夜中に家にかえってくる。かえってきたら、おまえさんをつれていってやる。というのは、わたしの家族はおまえさんをみたら、ほつておかないからだ」といった。女は、「よろしい」

といった。女はいくと、川のところをいた。若者はみんなとウシをつれてかえつてくると、「おまえたちは日暮れどきから、小屋にはいれ。ぼくは頭がいたい。ぼくはうるさいのがいやだ」といった。

さて、よろしい。みんながしずかになると、若者はいつて、女をつれて、自分のところにかえつてきた。二人はいっしょにねている。二人はしたいことをしおえた。若者は死んでしまった。男は死んでしまった。男が死んでも、女はにげていこうとしなかった。女は、「どうなの。わたしはこの若者のところにきた。この人が死ぬなら、わたしの手のうちで死ねばよい。わたしはにげることなどしない。この人をほつておけない」といった。女はそこにいる。女は足をのばし、若者の頭をとり、自分の膝のうえにのせた。女は、夜があけるまでそのままいた。女はないている。

さて、奴隷が、「あの人は大丈夫か。あの人は病気だといった。いつて、あの人をみてみなさい」という。

さて、一人の奴隷がいき、「平安、なんじらにあれ。平安、なんじらにあれ」と挨拶をし、小屋をあげると、小屋のなかで若者が死んでおり、そこに女がいた。奴隷は、「なんだ。この女がやってきて、このようなことをしてかして、わしらのところで、この人をころしてくれた」といった。人びとは大声をあげた。人びとは穴をほり、若者を埋葬した。人びとは使いをだし、村にいる若者の父親と母親に若者の死を知らせた。父親は母親と大声をあげながら、やっ

てくる。父親は、「だが、こんなことをしてくれたのかわからない。むしろは息子を野原にやらせた。というのは、息子が死なないで、息子にわたしの財産をついでほしかったからだ。だが、こんなことをしてくれたのか」という。父親と母親がやってきて、大声をあげてないている。女はすわったまま、どこにもいこうとしなかった。

さて、術をつかう人ができた。術をつかう人が、「おまえさんたちはおまえさんたちの息子にいきかえってほしいか」といった。父親と母親は、「はい、いきかえってほしい」といった。術をつかう人は、「奴隷たち百人が草をもつてくるように。奴隷たち百人が薪をもつてくるように。奴隷たち百人が穴をほるように」という。奴隷たちは穴をほった。奴隷たちは薪と草をもつてきて、つんだ。奴隷たちは火をもつてきて、それに火をつけた。術をつかう人たちが、「死んだ息子の父親でも、母親でも、この穴のなかにおちていけば、死んだ息子はいきかえる」といった。

よろしい、さて、父親は帽子をとると、挨拶をして、「息子よ、息子よ」という。父親は穴のところまできて、穴にとびこもうとしたところ、体に火がついた。父親はもどつていき、よめさんに、「水をくれ。水をのむ」といった。父親は水をのむと、もどつていった。父親は、「もう、じゅうぶんだ」といった。母親がたちあがった。母親はいつて、穴にとびこもうとする。母親はいつて、大声

をあげて、穴のそばまでいった。いくと、体に火がついた。母親は、「もう、じゅうぶんだ」といった。二人ともきて、一生懸命なんとかしようとした。

さて、女が、「わたしがしてもよいの。それとも、この人たちだけしかだめなの」という。術をつかう人が、「だががしてもよい」といった。

さて、女はおきあがると、なきながらあるいていく。

さて、女が頭からかぶっている布に火がついた。

さて、女は穴につくと、火のなかにとびこんだ。火がきえてしまった。火がきえると、若者ができた。若者は手にオトカゲをもっている。

さて、術をつかう人が若者に、「おまえさんがオトカゲをはなすと、おまえさんの父親と母親が死んでしまう。もし、おまえさんがそのオトカゲをころしてしまつと、おまえさんをいきかえらせてくれた女が死んでしまうだろう。おまえさんはどちらかをえらぶのだ。かならず、えらばなければならぬ。わたしはいつてしまふ」という。

(一九六九一七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアブドゥッ  
ラーイ・ウスマヌ、マルアにて)

## 268 大臣の息子と王子

この話は、大臣の息子と王子の話。大臣の息子と王子はおなじ日  
にうまれた。大臣の息子は自分の母親の乳をのもうとしなかった。  
大臣の息子と王子はいっしょにしてもらい、いっしょに乳をのん  
だ。二人はいっしょにおおきくなった。二人は一つの小屋をつくっ  
てもらった。二人はいっしょにねる。二人はおおきくなるまで、い  
っしょにねる。二人は王さまの屋敷をでた。二人は屋敷をつくって  
もらった。二人は一つの小屋でいっしょにねる。

さて、王子はあるとおいとところにすむ王さまの娘にいいよって  
いた。

さて、日暮れどき、王子は幼友たちである大臣の息子に、「どこ  
その王さまのところまで、ぼくについてきてくれるかな。ぼくは  
いって、ぼくがいいよっている娘をみるのだ」という。大臣の息子  
は、「よし、ついていってやる。友よ」といった。

さて、その日の日暮れどき、黒雲がでてきた。黒雲がでてくる  
と、雨がふってきた。くらくらなってきた。

さて、王子がやってくる、幼友たちがいて、「いこうか」とい  
う。大臣の息子は、「いま、いけない、友よ。くらのに、こわく  
ないか」という。

さて、王子は、「ぼくはいく。きみは約束をまもらなかった。ぼ

くはいく」という。王子は立派な剣をもつと、肩にかけ、あるいて  
いく。稲光がすると、道をみる。稲光がすると、道をみる。こうし  
て、王子があるところにつくと、そこにおおきな木の洞があった。  
稲光がしたので、その洞をみつけて、そのなかにはいった。はいる  
と、ライオンがそこで人をたべたところだった。

さて、王子はなにかがうごく音をきいた。王子がそこに手をやる  
と、その洞のなかに、ライオンの子が二匹いた。ライオンの母親と  
父親はそとにでて、うろつきにでかけていた。

さて、王子はすわると、コーラの核をかじっている。幼友たちの  
大臣の息子は、「きょう、空がくらのので、ぼくは友だちとわかれ  
た。ぼくも、あいつのあとをいこう」という。大臣の息子はたちあ  
がると、自分も立派な剣を肩にかけた。稲光がすると、道をみる。  
稲光がすると、道をみる。大臣の息子は木の洞のところについた。  
大臣の息子はなにかが、なにかをかじっている音をきいた。大臣の  
息子は、「その木の洞にいるものよ、おまえさんがかじっているも  
のをわたしにおくれ」という。

さて、王子はなにもいわずに、その人の声をきくと、人の首をと  
り、大臣の息子にやけてやった。大臣の息子は、「さて、わたしも  
はいる」といった。大臣の息子は洞のなかにはいっていった。王子  
は大臣の息子を手でさわって、「なんだ、友よ、きみか。ぼくにっ  
いてきたのか」という。大臣の息子は、「あつ、なんだって。ぼく

は約束どおり、きみについてきたほうがよいとおもつてな」とい  
う。王子は、「よろしい。ここにしよう。夜があげると、残りをあ  
るき、娘のところにっこう」という。

さて、二人がそこにいると、雄ライオンは二人がいこうとしてい  
る王さまの娘のいる村にいき、その王さまの娘をつかまえ、ころさ  
ずに、ひっぱって洞につれてかえってくる。雄ライオンは洞にちか  
づいてくる。

さて、王子が、「この洞の主がかえってくる。でていかせてもら  
う」といった。

さて、王子は剣をひきぬいて、そとにでた。王子はライオンに  
大声をあげると、ライオンは頭をあげた。王子はライオンの首をき  
りおとした。首はあちらのほうにとんでいった。胴体はこちらにた  
おれ、ころがつている。王子は幼友たちをよんだ。二人がやって  
きて、(ライオンがひっぱってきた)人をもちあげた。一人が、「ど  
うだ。死んでいるか」という。もう一人が、「いや、死んでいない。  
すこし息をしている」といった。二人は娘の口を手でおさえ、娘に  
正気をとりもどさせた。三人はすわって、話をしている。王子はそ  
の娘が自分がいよいよにいこうとしている王さまの娘だとはわから  
なかつた。

さて、三人はすわって話をしている。

さて、雌ライオンがかえってくる。大臣の息子はそとにでると、

いって、その雌ライオンをころした。三人は木の洞のなかにもどつ  
てきて、そこにいる。

さて、大臣の息子がライオンの子どもをころすといつた。王子  
が、「なんだって、ころすな。ころすな。喉をかききろう。ばらば  
らにしないでおこう。というのは、夜明けに首をぬえばよいから  
だ」といった。大臣の息子が、「よろしい」といった。

さて、王子と大臣の息子は王さまの娘に、「おまえさんはどこに  
すんでいるのか」とたずねる。娘は、「わたしはどここの村にい  
る」といった。王子が、「おまえさんの父親の村に、勇気のある男  
がいるか」という。娘は、「わからない。わたしがあなたたちにだ  
れとだれとに勇気があるといえば、うそになる」という。王子は、  
「もし、アッラーがはつきりされるなら、わたしたちはそれをはっ  
きりさせたい」という。娘は、「よろしい」といった。ところで、  
娘の父親の村で、王さまは娘がいけないのに気がついた。人びとは太  
鼓をたたいた。みんなウマにのつた。投げ槍を六本もつものも、剣  
をもつものも、いろいろだ。王さまの娘が姿をかけた。人びとは娘  
をさがしにいく。人びとは娘をひっぱっていった跡をつけていく。  
さて、王子と大臣の息子はころしたライオンの首をぬいつけた。  
ライオンの子どもをころした。娘をつれてくると、ライオンのまん  
なかにねかせた。王子は、「みてみる。それらしくみえるではない  
か」という。

さて、王子と大臣の息子は木の洞のなかにはいり、すわっている。二人は、「娘よ、人びとがちかくまでやってきても、なにもいふな。おまさんは身をおこすな。その人たちをけっしてみるな」といった。娘は、「よろしい」といった。太鼓がどんどんちかづいてきた。

さて、ウマにのっている一人が、「王さま、あそこにあなたのお嬢さんがいます。ライオンにたべられています」といった。王さまは、「その男の首をきってしまえ。あいつはわしにうそをついていゑる。わしの娘がライオンにくわれているとは。あの男の首をきってしまえ」といった。人びとはその男の首をきりおとした。そのうちに、四人の男の首がとんでしまった。

さて、大臣が王さまに、「王さま、ほんとうです。よかつたら、わたしをころしてください。よろしかつたら、ころさないでください」といった。

さて、王さまは、「よろしい。奴隷たちはどこにいるか」といった。奴隷たちが、「ここにいます。王さま」といった。奴隷たちはウマにのり、ライオンたちのところについて、ころそうとする。どの奴隷もちかづいていくが、ころされるのがいやなので、ウマにのつてもどつてくる。そのうちに、奴隷はみんなもどつてきた。自由人もやってきて、ライオンをころそうとした。ライオンのところまでいきついたものは、一人もいなかった。娘のところについてない

のは王さまだけとなった。

さて、王さまは剣をもち、ウマをはしらせて、娘のところにつき、ライオンの首をきりおとそうと、剣をふりあげた。

さて、木の洞のなかにいるものが、王さまに、「なにをするつもりだ。それはもうころしたあとだ。おちつけ。ころすな。もうころしてある」といった。

さて、人びとは娘をおこした。二人は木の洞からでてきた。みんなわらっている。

さて、王さまは、「これはだれの仕業だ」といった。人びとは二人をよんだ。人びとは二人と娘をウマにのせた。人びとはもときた道をもどつていった。

さて、人びとは、「おまえさんたちはなにをしようとしていたのか」といった。王子は、「わたしはまえからずっと、王さまの娘にいいよつていた」といった。

さて、王さまは、「わしはおまえさんにこの娘をやる。わしはなんでも百ずつやる。それで、大臣の息子よ、おまえさんはどうなのだ」といった。大臣の息子は、「わたしはわたしの幼友だちについてきただけです」といった。王さまは、「おまえさんにも、なんでも百ずつやる」という。

さて、王子と大臣の息子は自分たちの村にかえつていったとき。

(一九六九—七〇年、語り手 パーサーウオ村出身のアップドゥッ



ライイ・ウスマーヌ、マルアにて)

## 269 父親が息子となにをしたか

父親が息子となにをしたかの話をしよう。雨がふって、雨がふりやんだ。雨期でくらかった。ここから、ガルアの市場にいくくらいの距離だった。ウシが夜におきあがり、うごきだした。ライオンが雌ウシをころした。ライオンだった。

さて、稲光がしたので、様子がわかる。

さて、息子はだれよりもさきにはしつていった。はしつていくと、ライオンをおいはらった。父親は槍を二本もってやってくる。父親が槍を二本もってどんどんやってくる、息子は一生懸命になつてゐる。ライオンは人が雌ウシをころすのとおなじように雌ウシをころした。息子は雌ウシを群にもどそうとしてゐる。父親は槍をなげようとかんがえている。父親は、「なんだつて、まだ、槍をなげないでおこう」といった。父親は手をやり、息子の手をつかんだ。父親は、「だれそれよ、きょう、おまえはずかしいおもいをさせてくれるところだった」といった。父親は、「わかるな。おまえはわしがやってくるのがわかる。もし、わしが槍二本でおまえをさしていたら、わしは臆病者ということになる。それとも、おまえが臆病者ということになるか」といった。

さて、わたしはどちらがえらいかわからない。

さて、むこうまで、やってきたものがえらいか。最初にやってきて、雌ウシを群にもどしたほうがえらいのかわたしにはわからない。

(一九六四年九月 語り手 ウォダーベ・ホントルベ氏族の人、  
ガウンデレ地方のヤルンパンのちかくのパバ村にて)

## 270 王さまの娘をぬすんだ人たち

泥棒とうまいやり方をしている人、イスラム教の先生、石をなげるとけつして的是をなさない人、両手でうける人、まばたきをすると、なんでもすきなことができる人がいた。まばたきをし、すきなことをするとは、目をこのようにしていると、自分のすきなことをしおえているということなのだ。まばたきをする人は船をこいでゐる。ある王子、すなわち、ある王さまの息子がたちあがった。王子は野原にいった。ある野原にいくと、王子はある王さまの娘をくれといった。王子はその王さまの娘と結婚したかった。王子はその王さまの娘と結婚しようとした。

さて、その王さまは、王子は自分の娘と結婚できないといった。王子は家にかえってきた。王子がやってくる、イスラム教の先生と、うまいやり方をしている人と石をなげると、ねらいをさだめ

たものを手に入れる人と、両手でうけとる人とまばたきをするあいだになんでも、のぞんでいることができる人がいた。

さて、この人たちはいっしょになつて、でかけていった。この人たちは船につて、船をこいでいる。この人たちはあちらについて、船からおりた。この人たちは、「よろしい。どうして、王さまの屋敷にはいるのか」といった。イヌがほえかけた。うまいやり方をしてる人は、イヌに肉をなげてやった。イヌは肉をたべている。イヌはこの人たちにむかってほえるのをやめた。この人たちはそこをとおりました。ウマがいななきかけた。うまいやり方をしてる人はウマに草をやった。ウマは草をたべている。この人たちはみんな屋敷にはいっていったではないか。女が声をだそうとすると、うまいやり方をしてるものは、その女に綿をなげてやった。女はその綿をつむいでいる。

さて、この人たちは王さまの娘のところについた。この人たちは王さまの娘をつかまえた。あとは、にげるだけだった。そのあとには、にげるだけだった。この人たちは娘をつかまえた。イスラム教の先生はすわつて、なにかをみた。泥棒はいくと、屋敷のなかまですわつて、娘を屋敷の入り口くらいまでつれてきた。くると、奴隷たちがかえつてきていた。奴隷たちは屋敷をとりかこんだ。奴隷たちは、「よろしい」といった。王さまといっしょにいる人はハイタカをつれてくる。(その人がハイタカをはなす。)ハイタカは娘をぬ

すみにいった人たちのところから、娘をとりかえし、つれていった。イスラム教の先生がみてみても、どうしようもないということがあった。イスラム教の先生は河原からおりて、船のところに行こうとする。ハイタカたちはたちあがり、とんでいく。ハイタカはそこをとおらずに、娘をもつたまま河原で旋回している。壁のうえで、娘をつかまえている。娘と旋回している。娘をもっている。ハイタカは娘をぬすみにいった人たちのところにつき、そこをとんでいこうとするとき、石をなげるとけつしてのはなさない人は、石をとり、ハイタカにあてた。ハイタカは屋敷のなかにおちた。両手でうける人は、娘を両手でうけとめると、娘を船のなかになげこんだ。娘をぬすみにいった人たちは、とつくのむかしに、船にすわっている。みんなすわっている。みんなが船にすわると、またたくあいだに、川をわたってしまった。この人たちはいった。王子はこの娘と結婚したとき。

さて、この人たちのうちで、だれのやり方が一番か。イスラム教の先生が一番いいやり方だった。先生がなにかをみなかったら、奴隷たちが屋敷をとりまいていたから、どうしてそこからでてこられたか。

さて、いくときには、うまいやりかたをしている人がまさつていた。

さて、役にたつという点から、泥棒はもつとも有益だった。

さて、王さまの屋敷で仲間をとおりすぎさせるといふ点では、いやり方をしている人がうえた。

さて、娘を手にいれるという点から、両手で受けとめる人と石をなげる人がまさっている。だれ一人として、仕事をしていない人はなかった。

さて、おまえさんは、この人たちのうちだれが、一番かいつておくれ。

(一九八三年一月二日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、ガウンデレで、自分の姉さんからきいたという)

## 271 三人の能力のある人たち

魚とりがいた。この人たちは、魚をとりにいき、矢をいて、あっちこっちをうろつく人たちなのだ。

さて、この人たちは村のなかをあるいている。三人は村にはいなかった。三人はいくと、魚をとって、もってきた。一人は雨にうたれなかつた。いくら雨がふっても、いそいで雨からにげてしまう。

さて、もう一人は地面にころばなかつた。この人は草をあむ。ゴザなどをあむのだ。雨にうたれない人というのは、どんな雨がいでやってくるか、この人にふりかかろうとしても、この人は雨がや

つてきて、一滴、二滴ふっているあいだに、仮小屋をつくって、その小屋のなかにすわってしまった。わかるな。この人は雨にふられない。

さて、もう一人は、すわっている。この人はこのようにしてあるいていく。わかるな。雨がやんだからだ。この人は友だちのところにあるいていく。

さて、この人はすべつて、ころびかける。この人は野原の草をきると、それをまとめ、ゴザをあむと、そのうえによこになった。この人はゴザのうえによこになった。なにも、おこらなかつた。

さて、もう一人がおきあがり、水がいったいになった川にいく。川に水がいったいだつた。この人はいそいでいる。水がだんだんふえていき、水は道にまであふれそうになる。この人はやってきて、そこをとおりすぎた。水がやってきた。この人はそこにつくと、そこをとおりすぎた。水にさわられなかつた。

さて、わたしに、だれが一番かいつておくれ。  
一番まさっている人が一人いるではないか。

さて、一人はどうして、野原の草をみんなかり、やってくると、それをあつめて、それでゴザつくつて、そのうえによこになれたのか。

さて、もう一人はどうして、雨がふりはじめると、小屋をつくつて、そのなかにおられたのか。もう一人はどうして、水がやってき

て、そこをながれかけると、水よりはやく、そこをとおりすぎられたのか。

(一九八三年一月二日、語り手 アーマドウ・ルファイー、ガウンデレにて。この話は、ヤウンデで、兄からきいたという)

## 272 二人の男

勇気のある男の子がいた。一人はこの町のようなところにいた。もう一人は、ガルアのようなところにいた。

さて、二人はいっしょになろうとし、やってきて、であう。二人はやってきて、野原のまんなかであつた。野原の怪物の小屋がある。おそろしい野原の怪物がその小屋でねている。二人は野原の怪物の小屋に行く。一人がやってきて、小屋にはいった。男はやってきて、小屋にはいった。そこにすわつた。もう一人も小屋にはいった。小屋の入り口にすわつた。雨がふっている。雨が何度もふつた。一人はタイガーナット(カヤツリグサの一種の食用の根っこ)をもっている。もう一人はバラニテス・アエギブティアカの核をもっている。一人はすわつて、自分のものをたべている。もう一人も、すわつて、自分のものをたべている。二人はずっとたべている。

さて、あとからやってきたものが、なかにいるものに、「おまえ

さんがたべているものをわたしに味見させておくれ」という。なかにいるものは、「よろしい」というと、そこにいるものに、人の足をわたした。あとからやってきたものは、それをうけとつて、おいておいた。なかにいるものは、バラニテス・アエギブティアカの核をわたした。そこにいるものは、バラニテス・アエギブティアカの核をとつた。あとからきたものは、タイガーナットをとつて、わたした。なかにいるものは、それをとつた。二人はわかれた。二人は、どんだん家にかえつていく。一人が自分の町につきかけた。もう一人も、自分の町につきかけた。

さて、二人とも、挨拶をかわしてないということをおもいだした。二人ははしつて、やってきて、であつた。二人は道であつた。二人は挨拶をかわした。一人が家にかえつてきた。こちらのほうにいた男も家にかえつてきた。

さて、男は自分の小屋にいった。自分の小屋には、アリがいっぱいだった。穀物倉のなかにも、アリがいた。いった小屋にはどこにも、アリがいた。男は友だちの小屋にいった。友だちは小屋をあけないといった。

さて、男はおこつた。男はやつてきて、アリをみた。ほんとうのこと、それはアリではなかつた。精霊がアリになっていたのだつた。男はアリをみて、アリのところにはいった。どうなっているかみてやるといった。男はくりかえし、アリをみた。

さて、あるものが男に、「アリのなかについてほならない」という。あるものは男に、「アリのなかにはいっていきなさい」といった。心は、いけといつた。あるものは男に、「いかなないように、いかなないように」という。男はたちあがると、いちばんアリのとおおい穀物倉にとびこんだ。男はそこにはいった。そこにはいると、アリは銀などにかわつた。

さて、男はそれをあつめた。男はそれを取り、自分たちの屋敷をつくつた。男は金持ちになつた。男はそこにおちついている。もう一人の男が家にかえると、自分の小屋のなかにライオンなど野原の動物たちがいて、地面をほりかえし、おこつていた。男は小屋にはいつて、動物たちをころそうとした。ところが、動物たちはいろいろなものになり、男の小屋をきれいにした。男はすわつた。

この二人のうちどちらが、より勇敢か。

(一九八三年一月二二日、語り手 アーマドウ・ルフアーイ、ガウンデレにて。この話は、ガウンデレで、ガルアより北の出身のフルベ族の兵士からきいたという)